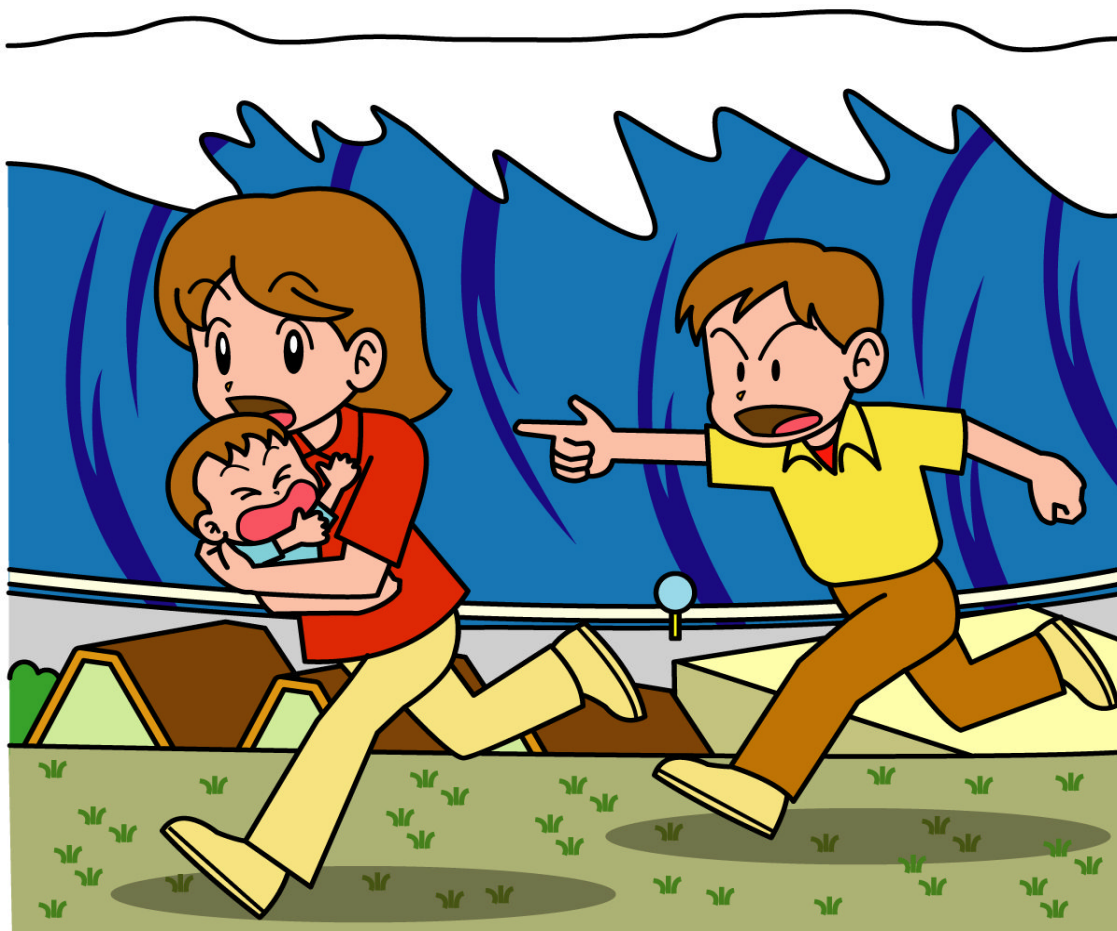


地域の防災

(自助・共助、津波編)



防災塾・だるま

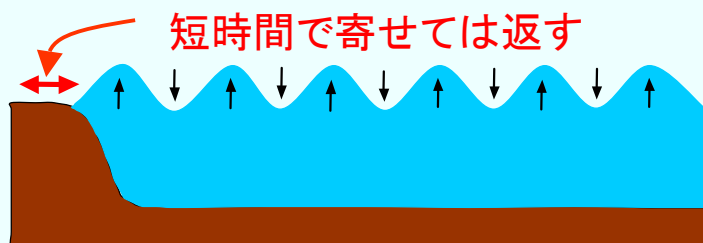
最悪の津波を想定

2011年3月11日の東日本大地震による津波は凄まじいものでした。これが夜の満潮時だったら被害はさらに拡大していたでしょう。

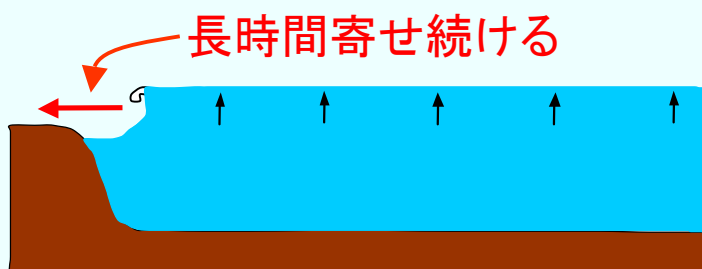
房総半島でガードされた東京湾内でも想定（1m）を超える1.6mの津波がありました。東京湾入り口直撃の大津波としては5m程度を、太平洋に面する相模湾では10m超を想定すべきです。

普通の波と津波の違い

波は次々に押し寄せて来るように見えますが実は上下しているだけです。



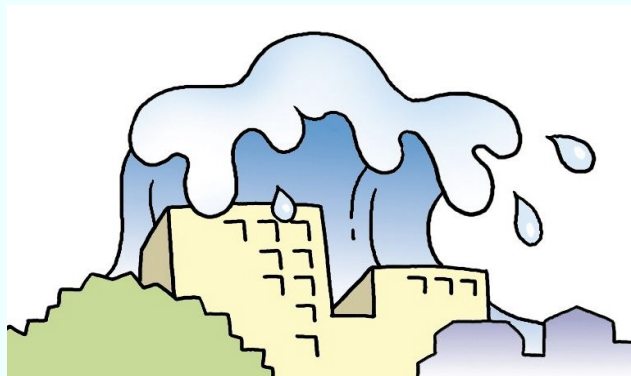
台風などの大波は波高が10mでも波の山と山の間隔が短いので、一山ぶんは押し寄せますが次には返すので、陸の奥までは入ってきません。



一方津波は、波の山と山との間隔がきわめて長く時間にして数分から何時間間も場合があります。

寄せる時間が長いので、沿岸の被害だけに止まりません。波高の高い津波は浅瀬に来ると山が前のめりになり破壊力が増します。周期の長い津波は巨大な高潮で堤防が決壊したようになり、内陸深くまで押し寄せてきます。津波は1波目より3波目4波目などが最大になることが多々あります。

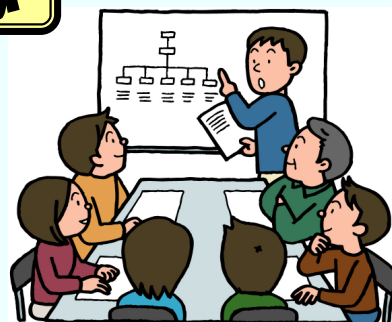
津波の威力



津波は押し寄せる水の壁です。同じ体積の水は自動車の数倍の重さがあります。押し寄せる津波は、家のガレキや自動車などをまるで矛のように前面にして迫ってきます。その時にどんな重機をもってしても立ち向かって防ぐすべはありません。

想定した大津波への対応

千年超に一度の大津波に耐える堤防を敷きつめたり、全ての家を高台に移すのは現実的ではありません。想定を甘くせず、防御の限界を知った上で、津波に対する避難場所やしっかりとした避難体制を合わせて整備すると共に住民も意識を高く持って対処することが大切です。



あなたの家庭、あなたの地域は、大津波発生時の避難場所周知共有、そして津波発生直前の警告手段および緊急避難誘導の仕組みはできていますか？

家族の津波防災

逃げる！

考え方

津波には勝てません。大津波警報がでたら、家族そろって一刻も早く率先して逃げましょう。

いざその時は「逃げる」だけです。しかし、普段から以下のような事前の対策はしっかりと講じておきましょう。

高台居住者も外出中には我が身です。対処の心構えは必要です。



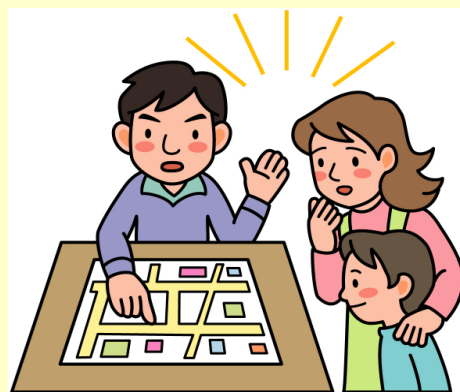
事前の対策①

**事前の考察
とっさの判断**

津波は火事や洪水と違い

ゆっくり考えている余裕はありません。以下の事を家族で共有しておきましょう。

- ・ 逃げる高台の場所
（10分程度で行ける広い場所）
- ・ 最寄の逃げ場所
（高台まで無理な時は鉄筋高層建物）
- ・ 貴重品より先ず我が身
- ・ 靴と明かりの準備
- ・ 家からの速やかな脱出
- ・ 近隣へ避難を知らせる
- ・ 要援護者のある家庭は、車椅子や乳母車を備えておく



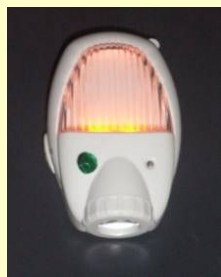
上記事項等をとっさに判断

過剰と思える行動を躊躇してはいけません。危機管理においては「妥当な選択はなく、過剰か失敗かのどちらかです」そして「最悪を想定して行動せよ」「疑わしきは行動せよ」「空振りには許されるが見逃しは許されない」が鉄則です。

事前の対策②

家の耐震補強と家具の固定

津波では一刻も早く逃げるのが大切です。家が倒壊したり家具が散乱しては遅れをとります。家と基礎とをしっかりと固定し、流されなければ、



いざその時の明かり

停電の夜は真っ暗です。家具が散乱した状況では動きません。停電でも点灯する**充電式LEDライト**を備えると行動の初動が早くできます。逃げる時も真っ暗で道も分かりません。**LED懐中電灯**は欠かせません。



一刻も早く脱出・救助するツール

家屋内に閉じ込められると避難に遅れをとります。**バール**や**テコ棒**は脱出や救出時の道具として備えておくと役立ちます。

避難には底の硬い靴を 地震後は割れたガラスやガレキの散乱が想定されます。やわな靴では怪我して逃げる行動が鈍くなります。津波後のガレキ現場はしっかりした靴でしか歩けません。

いざ・その時の行動

**津波が来るぞー
空振りには許される**

避難時に際して

近隣に大声で「津波が来るぞー」や笛などで知らせる。そして、可能な限り家族そろって、予め決めた十分な高台へ率先して逃げましょう。率先して逃げる人に多くの人が続きます。そして次のことを守りましょう。

- ・貴重品はあきらめる
- ・車は使わない（過疎地は除く）
- ・引き返さない
- ・津波警報が解除されるまで戻らない



結果的に大津波が来なくても、失うものではありません。次に来る大津波への実訓練になり、そして家族と近隣との信頼関係と絆が強くなります。

近隣地域の津波防災

考え方

地域から犠牲者を出さない

地域の命を守りましょう

いざその時に津波から家屋を守るすべはありません。地域から犠牲者を出さないことに専念しましょう。そのためには事前に、津波避難を周知する手段の構築と共助連携の生きた体制づくりが肝要です。



事前の備え①

仕組み作り

・地域住民全員の把握

災害時に全員への速やかな連絡に不可欠です。健康者も負傷すると要援護者になります。自治会・町内会の住民把握は個人情報には当たりません。

防災家族カード（平成 年度）					
スパン	ロット	住所		携帯電話	
家族数	電話番号	氏名	男・女	年齢又は 年齢代替	血液型
特記事項:					

防災家族カードの収集と活用

・地域で連携共助できる仕組みの構築

災害時は責任者も被災したり不在であったりします。指揮采配の仕組みと支援できる人を多く確保しておく必要があります。

・連絡手段の構築

電話もケータイも使えなくなります。走って連絡では間に合いません。地域の班長さんなど連絡手段として「トランシーバ」を活用しましょう。

・災害時の「行動マニュアル」作成

災害時は何を優先して行動すべきか、誰が指揮するかなど、基本的な「行動マニュアル」はパニック状況下での行動に役立ちます。

機材の準備

・トランシーバの活用

トランシーバは放送局のように多人数へ連絡することができ、災害時には最適なツールです。自治会・町内会の役員班長は全員トランシーバを所有し使い慣れていれば強力な武器になります。



・笛の携帯励行

皆が笛を携帯し、津波など非常時の吹き方を決めておき、全員で吹き合えば避難周知ができます。



・ボールやテコ棒などの単純救助資材

閉込めからの脱出など、誰でも使える基本的で有効なツールです

地域の津波避難訓練

津波の避難は、丈夫な鉄筋高層居住者以外の全地域住民が対象です。一部の人だけの訓練でなく、全員参加の実戦的な訓練に取り組みましょう。

実戦的訓練（トランシーバの活用が有効）

・避難指示全戸伝達訓練

電話・ケータイが通じない時、一秒でも早く全戸へ避難指示を伝える訓練。そして避難済みを確認する訓練。トランシーバで一斉に役員班長に知らせ、そこから手分けして各戸に知らせる。知らせを受けたら笛を吹いて近隣に知らせると共に、自宅前に避難状況を示す「状況表示板」を出す。実際に高台までの避難訓練は、一部の人での検証でも良いでしょう。

・不意打ち訓練

平均して年に数回ある「緊急地震速報」が、出た時に訓練を行なうのは現実的です。実施し反省して順次改善して行けば良いでしょう。

状況表示板

月 日 時
出られない人が居ます
人 全員
〇〇高台へ避難しました

緊急地震速報

地域の絆

防災は仕組みと地域の絆が両輪です

いくら良い仕組みを作っても絵に描いた餅では何にもなりません。大災害時にうまく機能するには地域が家族のように心配し合う関係のあることが大きな力となります。



地域の絆づくりは多様な方法がありますが簡単ではありません。地域全域のゆるやかな関係を作る方法として、「防災豆知識カード」を何枚かずつ全戸に配布し、お互いに近隣家庭を訪問して名刺代わりに交換する「近隣の顔の見える関係づくり」と「安否確認」を兼ねた訓練を実施している地域があります。



津波への対処10か条

1. 最悪の大津波を想定し、その防備の限界を知ろう。
相模湾で10m超、東京湾内でも5m程度の津波はあり得るが、それに対する防備は無いに等しい。
2. 大津波時の対処方を家族・近隣で共有しておく。
10分で逃げる場所、5分での場所を決めておく。夜なら懐中電灯は命の明かり。
3. 貴重品より命を優先せよ。
貴重品はあきらめよ取りに戻る1分が命取りになる。命より大切なものはない。
4. いざその時、近隣に知らせる仕組みをつくれ。
停電でも可能な方法。例えば笛を皆で持ち、吹き方を決めておく。
5. 大丈夫と思わず、率先して速やかに高台へ逃げよ。
貴方の躊躇が回りの人に伝染する。十分な高台へ率先して逃げよ。
6. 車は使うな。(過疎地を除く)
一刻を争う津波逃避では人で道路はあふれる。車は走れないし邪魔になる。
7. 逃げられないと判断したら、近くの鉄筋建物の高層階へ。
大型で鉄筋建物の高層階は、高台に次ぐ安全場所。とっさの判断が肝要。
8. 引き返すな、津波警報解除まで戻るな。
津波1波より、長時間後の2波3波が大きいことが多い。自己判断は禁物。
9. 底の固い靴を履いて逃げる。
地震後はガレキ道。怪我をしては逃避行動が遅くなり、後の活動も制約される。
10. 家の耐震化と家具の固定はおこたるな。
家が倒れず家具の散乱がなければ、逃げ出し時間が短縮される。
津波で家が流されなければ、自宅と地域の被害が軽減される。

作成：「防災塾・だるま」会員
片山 晋 TEL045-772-1286